第九章

おわりに:南海の女王陛下に対する信仰とジャワ人の生活への影響

〈286〉南海の女王陛下の存在に対する信仰は物質界での生命とは反対の声明があることに関する覚醒を形作っている。観察できたり認識できる世界の現象とは反対に、神秘的な手法を通じてのみ知覚できる幽体の名前を知って、弾力的で合成された性質を持つ自然への感謝の形で感じとれるのである。真実の段階における人生経験は、心身の間で互いに結び合い連続して繋がっている全体、荒っぽいこの世界と滑らかなあの世との間の心身の間として存在する。自然が尊敬の念を育成できるようにそのすべては互いに均衡を取ったり尊敬しあったりすることを必要としている。

南海の女王陛下は幽界の現象の一部を構成している。彼女が唯一の霊的存在ではなく、イスラムの信仰と近しい骨格に入っている「とあるもの」に含まれていないとしても、彼女が上記の霊体の次元に入っている ruhi(生命)を伴う barzakhit(最後の審判までの死後の世界)の存在の一つであるからである。それ故に、神に選択された(特別なミッションを遂行しているから)霊的存在の一つとしてその存在と位置に対する信仰は禁止された信仰の種類に含まれるものではないのである。〈287〉

宗教の教義で特定の期間ごとに天使と精霊をこの世の諸事を制御したり処理するためアッラーがこの世に下すことを述べる場合には(al-Qadr:97)、ジャワ人ムスリムの信仰では南海の女王陛下が、アッラーから下された上記の精霊の一つに含まれるのである。ジャワ人には南海の女王陛下は道を誤った化け物や幽霊の種類ではないと信じられている。これは自然界の al-malaikat al-hafadzah[1]の一部であり、まずはこの島々に存在するのである。

しばしば人に道を誤らせる Nyai Rara Kidul と Nyi Blorong などの名前で呼ばれている霊が存在したとしても、上記の話は別な問題なのである。確かに Nyai Roro Kidul などは人に道を誤らせるために仕事をしている saithaniyah[2]の組織の一部なのである。それ故に、南海の女王陛下をしばしば標的としている道を誤らせる誘惑や偶像崇拝、迷信などの文脈において、慎重に理解しなくてはならない二つの見方がある。まずは常に人を惑わす悪魔の要素であり、そのひとつの方法は南海

1 「諸天使」とでも訳すのであろうか。
2 「魔性」

の女王陛下の形で、まねることである。二つ目は信心と確固とした信仰と持たないその人間の観点そのものであるがゆえに、彼は人生において悪魔の手下である霊界の存在とともに働いて近道を突き進むのである。この件では誤った人間性の要素は南海の女王陛下に対する信仰の問題ではなく、南海の女王の過ちでもないのである。

それゆえ、下線を引くべきことは、南海の女王陛下に対する信仰の次元の一つは、ジャワ人にとって、天使と悪魔、精霊などに対する信仰と同様に自然界と幽界に対する信仰の形であると認識することである。さらに、整理が必要な点は、信仰に対する見解でまだ曲がっているいくつかのものをまっすぐにするために宗教行為を必要としているその信仰への応用という文脈なのである。例えば、これは宗教のみならずジャワ人の宗教観でもはっきりと禁止されていることではあるが、悪魔と一緒に仕事をすることや道を誤った悪魔や精霊のたぐいの協力を得ることである。〈288〉

海神祭り(labuhan)や特別な舞踊、厄払いなどの伝統儀式のような南海の女王陛下の存在に関係する各種の伝統に関連する問題は宗教というものにおける「嘘つき」[3]であるとまだ確実には言うことができていないものもある。ゆえにジャワ人の行う上記の各種の伝統儀式は、神への感謝の印であり、寄付の一つの形であり、アッラーが創造した幽体の存在を認知するスペースとして、自然の平衡の形の基礎と骨格なのである。上記の各種の伝統儀式は Rabb- al-‘alamin (すべての自然の保護者であり支配者)としての神の支配の形式の一部なのである。

まずは信仰という面から見ると、これらいくつかのはなしが論議の的になることは確実である。この件では、各種の説や信仰、そして各々の宗教観の間の相違点の存在に関する博識と互いの意見の尊重が必要となる。

スーフィズムの観点から見ると、南海の女王陛下の存在は明らかな裏の世界に住んでいる霊魂の具現化の一つとしてごくごく普通の性質を持っているのである。精神的な放浪者が上記の段階で霊界での誘惑の罠にかかった時、アッラーへ向かう道程においてその人はまだベールをかぶっていることを意味するのである。

---

3 「背信者」の意味

まだ「普通」であるジャワ人社会から支持を得るため、「健康で良いお付き合い」という方法で姿勢を保たなくてはならない、すなわちこの世での互いの存在や地位を相互理解する、お互いに尊重しあうための必要なものが存在するという形として南海の女王陛下に対する存在は霊界の次元である信仰の一つの形を形成しているのである。ジャワ人によると、幽体のちがいを labuhan や厄払いなどの区別できる方法で評価するので、自然と人間の存在にとっての善行を具現化する義務を共に有していると感じているから、彼らも人間の存在を尊重するのである。〈289〉

南海の女王陛下の存在に対する信仰がジャワ人にとってある種の役割と影響を有しているのだろうか?この質問は色々に角度から回答できる。

第一の角度はジャワ人の信心の文脈である。南海の女王陛下に対する信仰は不明瞭な観点、すなわち霊界、における信仰に含まれる。それゆえ、この観点が正しく勧められた時、ジャワ人にとってのアッラーに対する信仰と確信はますます増加することになる。このことは南海の女王に対する信仰の概念とその状況を「持ち上げたりおろしたり」する方法で行うことができるのである。

「持ち上げる」という文化の共有度合い[4]は南海の女王陛下のパーフォーマンスがいまだに神の支配下にあるという信仰を篤くする方法で行われる。ジャワ人は自分自身がアッラーにまだ遠い存在であるということに気が付いているゆえに、ジャワ人にとって南海の女王陛下はアッラーに近づく道具の一つとして見ることが可能であるから、このことは当初からジャワ人に気づかれていて、南海の女王に対するその信仰はこのように重要な位置を占めているのである。この意味においてこそプロパガンダの実施が行われるのである。上記のアッラーから「遠い」という感覚は、一つの方法が南海の女王陛下を通じるものであるとしても、アッラーに「より近づく」ための方法がほかにもまだたくさんある。南海の女王陛下への信仰がこれだけで払しょくできることが確実であるとしてもである。南海の女王陛下の存在は宗教の谷底に、すなわちインドネシアの大自然界に神が置いた「精霊」の一部として当然配置されるのである。

他方、「覚醒の低下」という文化の共有度合いは南海の女王陛下とあまり関係

4 コンテクスト

がなく確かにさらにその数が減少しつつある各種の伝統儀式という方法で見られる。各種の伝統儀式で宗教色を与えることは必要であるが、例えば「イスラムの伝統儀式」の一部とは言うことができないとはいえ、上記の伝統儀式はますますイスラム色を強めている。事実、伝統と fiqih[5]の文脈との結合は、既に存在する各種の伝統儀式の実施と調和することになるだろう。〈290〉

第二の角度はジョグジャカルタ王室の関係である。ジョグジャカルタとスラカルタの王室の存在にとって、ジョグジャカルタサルタン国の存在がその周囲にある超自然界と切り離すことができないので、南海の女王陛下の存在は大変重要な役割がある。代々伝わってきた南海の女王陛下に関する神話は、南海の支配者へ向けられる宗教行為を通じてジョグジャカルタサルタン国の支配者によって内面化された。そのモデルで、Leach (1981:82)は、可視世界と不可視世界を伝統儀式が橋渡ししていると解説している。南海の女王陛下に関連して実施されている各種の伝統儀式は、不明瞭な[6]超自然界と結びつけるために現在はジョグジャカルタとスラカルタサルタン国であるマタラムの国民と支配者たちからの努力のたまものなのである。全宇宙という文脈では、ジョグジャカルタの国民は一度に南海の女王陛下の王国の幽界の住民となり、逆にいうと、南海の幽界における存在はマタラム王国の支配地域内の存在であると、マタラムの国民と支配者に正しく理解されているのである。たとえ次元が異なろうとも彼らは同じ地域に一緒に住んでいるのである。このことは神秘的に混乱と差異を生じさせないようにこの両世界の協力があるという絶対理解を引き出すのは確かである。まあ、マタラム国民全員が神秘的に直接通信することができないために、行われている各種の伝統儀式はこの協業の橋のようになっている。それゆえ、この儀式の緊急性はあちらの世界と連絡するための神秘的な能力を有していない大多数の国民にとって極めて重要になっていて、幽界とのコンタクトと交信をその中に組みこんでいる。

ゆえに原則的には、南海の女王陛下の神話論は、施政における武器としてジョグジャカルタ・サルタン国の支配者に利用されていると言える。この神話論は毎日の生活の中で認識されているジョグジャカルタ王宮付近の人たちに尊重され、か

[5] イスラム的生活の手引書
[6] Datan kasat mata

れらの信仰を形作っていなければならない神秘の力を王宮付近で得ようとする有力者たちを目覚めさせる。〈291〉このようにしてジョグジャカルタ・サルタン国の支配者たちはその周囲にある神秘的な力を理解し認識することができるのである。これ以外に南海の女王陛下の神話論は、自然界の力と人間との間の仲介者としても使われているとともに、ジョグジャカルタの王室の存在の安寧と平穏を保証する要素のそのひとつとなれるためにも利用されている。

権力と支配の問題でアッラーを源とする権力としてジャワ人たちに確かに見られていることもあり、それゆえに施政を敷くうえで聖なるものに自分を近づける努力を常に要求されるのである。現世の権力とは天啓と超自然の祝福、支配の源と彼らとの緊密な関係があることのサインなのである。このようにして王個人から王国の地域の住民に安寧を保証し恩恵を与えることができる魔力を発すると考えられている。神から与えられた超能力でサルタンは超自然界と交信ができるとジャワ人に理解されている。事実、実際に起きたのはジョグジャカルタ王宮(現在ではインドネシア)の頂点にいる支配者とはアッラーに自分自身を近づけることができるようになった人たちであり、、ゆえにアッラーは、平和と繁栄を人々にもたらすことができる指導者になるひとたちに色々な ma'unah (Karamah のような)を伴って神の助けという祝福をお与えになるのである。ジャワのイスラム哲学の言葉では、一国の頂点にある指導者は知恵の頂点の段階に達したものでなければならないことが要求されている、すなわち自分の行動をコントロールできることであり、ゆえに精神世界と超自然界との交信を伴って彼は神から天啓を受けることができるのである。このようにしてその権力の下での自然の平衡が調和的に維持されることができるのである。

以上のように、Twikromo (2006)によると、ジョグジャカルタ王宮の人たちによる宗教行事の実施を通じて生きながらえてきた南海の女王陛下の神話は、神秘的なジョグジャカルタ・サルタン国の施政のシステムを安定化させ存続させることと緊密な関係を有しているのである。事実、アッラーを源とする力なのであり、ゆえに施政上サルタンは常に彼を取り巻く超自然界の権力者と交信しているのである。〈292〉 山や森、海などのような目に見える世界は聖なる存在の可視化であるがゆえに供物をささげたり布施を行わねばならないのである。さらには、ジャワの南海

には霊界の権力と権威の中心となっている、すなわち神の代理人(カリフ)のようなものの一人としての南海の女王陛下、大きな幽界の力を持っていると理解されているジャワの南海なのである。基本的には上記の供物奉納の儀式は自然の状態のバランスを取るための一つの方法として利用されている。Labuhan の儀式の時に Parangkusumo の管理人(juru kunci)によって唱えられる呪文は、上記の儀礼が国家と国民の安寧と安全と栄光を願うことを目的としていることを指し示している。

この現象は静的な性格を持つ宗教的論理だけでは理解することができないのは確実である。この神秘的な現象に関する理解は宗教の心理的な側面から近づかなくてはならない。Durkheim (Koentjaraningrat, 1981: 223-225 と 1982:85-102; Baal, 1987:201-220)によると、社会的感情により人の魂の世界において突出してくる魂の震えによって人間は宗教的な行動に突き動かされるので、真実の宗教的理想とは、同じ手法で聖なる存在を想像しそれと交信するという現実でそれらを合一させるすべての連携を有しているのである。

このようにして、ジョグジャカルタ宮廷の支配者と王国に住んでいる住民たちは儀式や信心そして神話のような比較的同一の方法を通じて同じ目的地に着くためにその宗教的行為を発展させてきた。伝統から生まれた形を形成している南海の女王陛下の神話は宗教的行為を行うことで人々を統一するための一つの手段として利用されている。さらにこのすべての伝統儀式の端には、南海の女王陛下へではなく神への願いの頂点が確かに存在するのである。しかし、こうではない目的と展望を有しているいくつかのサポート(あるいは宗教に合致しない展望)がいまだに見受けられるのは確かであり、整理しなくてはならない人間の願望と展望がいまだに存在するとしても誤った伝統儀式を行っているという意味ではないのである。〈293〉

第三の角度。南海の女王陛下の存在への信心に対してどのような態度をとるかという問題以外に、現在わが民族が目覚めなくてはならないことの一つは、実は古ジャワ時代以来この民族が自己の社会の栄光と安寧の基礎としての海の重要性について深い理解と注意を払ってきたことである。上記の覚醒は単に南海の女王陛下への信心の形であるだけではなく、海洋の強固な探検者としての先祖の日常で形作られて、二世紀以来ジャワ人は広い海に漕ぎ出し、ゆえに 10 世紀に

は地球上の大部分で交易と航海のネットワークを有していたことは国際世界で認められているのである。ジャワ人の海洋への情熱の退歩は、ジャワ島内陸部に王都が移転した後、海岸部が外国に占領され植民地化されて初めて起きたのである。それゆえ、海軍と航路の拡大のために当時の植民地主義と対決をしなくてはならなかった。事実、インドネシアの地から植民地主義が撤退した後、この民族はいまだ完全に海域を支配できていないのである。いろいろな海上での力はまさに外国勢力にその運営を委託しており、この民族は最小の部分を得ているだけなのが実情である。ますますこの部分と南海の女王陛下の神話の霧も失われていくとともにこの民族の海への熱情もますます衰えていっているのである。

デウィ・ランジャール[7]に北の海(ジャワ海)の派遣を南海の女王が委譲したので、海の「支配者」たる南海の女王陛下とインドネシアの王国の国王との「結婚」という形での理解は文脈的にみて、インドネシア民族の栄光と繁栄はこの国にとってどちらも非常に重要な資産として陸と海とを一体化したその成果に存在すると理解すべきである。インドネシア民族は確実に陸と海とを結合させなければならず、インドネシアの完全性を守護し、その島々を諸外国に奪取されてはならないのである。<294>財産とその天然資源も外国勢力に簡単に支配されたり提供されてはならない。過ぎさりし時代のインドネシアの大王たちが望んだようにそのすべてはこの民族に独自で運営されなければならず、インドネシア民族は繁栄するとともに大きな国となるのである。神の御恵みがあらんことを。

第九章訳出終了 2020/1/09

[7] Dewi Lanjar 北海の女王の名